

この心如来となる

歳のとき、父時国からの遺言として『我死去の後、世の風儀に随って敢えて敵を恨むことなかれ』

法然の父は述べた。殺生すれば永遠に恨みとなつてうけつがれ、殺し合いが続く。この法の教え、慈父の遺誡こそ、法然上人を生んだ最も大きな原動力であつた。釈尊の言葉(法句経 五)にもある。

まこと 怨みごころは
いかなるすべをもつとも
怨みをいだくその日まで

この地上にやみがたく
それでは、怨みは忍と報恩なる心を産み育ててくれる僧(僧伽)の中に組み込まなければならぬ。
一人では怨みは滅せられない。僧伽に帰依することである。

僧伽の内容

Buddhai sarānāṃ gacchāmi

私は僧伽に帰依します

インドの言葉では「世尊、法、僧伽」をサラナム(依るところ、憩うところ)として、私は行くと言っている。最後のガツチャーミが大切で、両性の愛情の交わりから高貴な思慕の念いをあらし、かつ、それを行動に表現する意味を含んでいる。それは他のものが行わなくても「私は行く」という強い思慕を決意と行動を言いあらしている。

僧(僧伽)に帰依するとは

報恩の報いとは、何気なく犯した一

度の過失が、意外に苦しい結果を招く。反対に、善根が大きな報いを現して精神上、肉体上、環境上に幸福な結果をもたらすこともある。

大無量寿経「悪人は悪を行じて苦より苦に入り、冥より冥に入る。善人は善を行じて明より明に入る」

しかし、人は善業によつて救われるのではない、信仰によつて救われるのである。信仰の開かれる直前には、人は善業より悪業を意識せしめられ、自己の罪障の深さを念う。

涅槃経に出る阿闍世は、父王を逆害してから罪を感じ、永劫地獄に淪まねばならぬ未来の暗黒におののいたことが、仏陀に救われる機縁となつた。(印哲P143)

機縁が熟せば、冷たい心で人を眺めたこと一つから、自己の罪障の深きことを念わされて、少しの明るさもない永劫の間を感知される時がくる。それは真の意味の宗教心の高潮した時で、真実の光明の世界に生まれる尊い機縁である。

信仰とは、信(stadha)信仰・帰依のころ、人々を仏と一体たらしめ、人を仏のごとくふるまわせるはたらきをする。信がもとになって、自己についての慚愧がおこり、貧り、瞋なども浄められて、自然に道を愛するようになる。(印哲P161)

三寶を帰依せん(よりどころ) 合掌

三歸依文の喜び

(仏壇を購入安置して)

お手紙より

季節の移り変わりは早いもので、もう10月に入りました。三寶寺に於ては、いつもお世話になっております。

又、先日、私共の仏壇入仏式にお忙しい中おこしいたきました上に、御礼まで頂きましたこと誠にありがとうございます。

私も月一回の法話会に出席させていただいた上に、お電話でも個人的なご指導を頂き、安置されたお仏壇に向かつて、合掌・礼拝、尊号を称讃させて頂いているうちに、自分の持つていろいろんな我が反省され、涙と共に流れていたのです。主人が難病ですが、私は今日これからも、健康に気をつけて頑張ろう、そして主人を悔いの無いように、和顔愛語で最後までつかえさせていだけよう、と誓いの中に夜眠る時、百回以上本尊様を尊号させていた

だきました。そしたら夢をみました。ボーボツと燃えるワラ、脇には大丈夫かと声をかける人、三寶寺に相談をしました。そしたら坊守様が二河白道の話をして下さいました。

燃えるワラは煩惱(病院の支払とこれからどうなる、どうしたら良いかという不安)、脇の人は世間の噂で、「お仏壇を買ったら不幸になった」と言われた世間の言葉に反応した私が、これ

からどうするといふよりも、なるようになつていく人生、そして皆さまの智恵をいただきながら、「主人よありがとう、私を気づかせて下さった」と明るく接する私になりました。心も落ち着いてきた今日この頃、皆さまから「変わってきたね、失礼だけど、すっかり大人になつてきたね」と言われるようになりました。

いつも三寶寺さんが、温かいご指導をすべての人々に対して見守つておられることを、隣人にお話させていただきました。そうしたら、「私も自分を高めるために法話に行くよ」と言つて下さいました。これからは良き法の友人と共に行かせていただきます。まずは御礼まで。

住職から……先日、この方の御主人御永眠(善逝)されました 合掌

二河白道とは

教行信証(信巻) P219 真宗聖典(東本願寺出版)

西に向かい行かん……一つの河あり、一つには火の河、……水の河……水火の中間に白道あり、闊さ四五寸……水火あい交じりて常にして休息なけん。……多く群賊悪獸あり、人の勤む声、決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。もし、住まらばすなわち死せん」「汝一心に正念して直ちに來たれ、汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」